

世間には、犬や猫が好きと言う人は数多くいますし、実際に大勢の人が犬や猫を飼っています。しかし我々から見ますと、いわゆる「犬好き・猫好き」を本当の意味で動物愛護家と呼ぶには首をかしげざるをえないことが多々あります。いくつかの実例を紹介し、今一度みなさんと一緒に検討してみたいと思います。

食餌と愛情

世の中には、自分の犬や猫を家族の一員と考えて溺愛するのはよいのですが、その想いが高じて動物を自分たち人間とまったく同じ感覚で扱うことが、動物を大切にすることだと考えている人もいます。しかしそれは時には動物にとっては有難迷惑・有害無益な場合もあるのです。愛犬家を自負している人の中には「犬にドッグフードをやるなんてそんな可愛そうな、うちの子には私達とまったく同じものを食べさせています。」と胸を張っておっしゃる方もいます。しかし、人間にちょうど良い味付けは、犬にとっては塩分が多過ぎて適当ではないのです。ドッグフードは文字通り犬のために調合され、犬にとって必要な栄養分をバランスよく配合したフードです。最近ではペットブームに乗って、日本のメーカーも子犬・成犬・老人・肥満犬など用途に応じたフードを開発しています。市販のドッグフードには、化学合成物質が含まれている危険性があると心配する人もいますが、それは着色料や保存料など人間用の食品についても同様のことが言えるでしょう。どうしても市販のフードをやりたいくないというのなら、人間とは別にあまりに油っこいものや塩辛いものを除いた犬用の食餌を作ってやるべきでしょう。

犬と住まい

犬を家の中で飼っている人は大勢いると思います。小型のいわゆる室内犬は問題ありませんが、大きな活動犬を部屋の中だけで飼うのは、犬にとってはたして幸せといえるのでしょうか？ マンションなど戸外にスペースがない場合は仕方ありませんが、子犬・老犬・病犬などは別として、若くて健康な活動犬は昼間だけでも庭で自由に放し飼いにし、日光や外気に触れさせてやる方がよいと思います。過保護にするあまり、冷暖房完備の部屋に一日中閉じ込

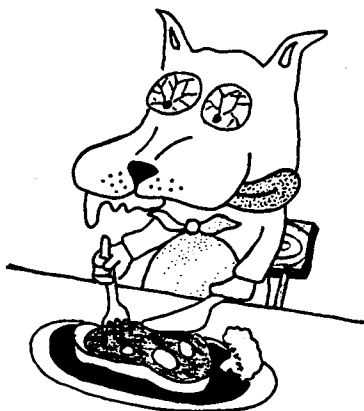
あなたはこんな時 最後まで保護者になってくれますか？

第7回 あなたは本当に動物愛護家と言えるでしょうか？ (3)

古木 昌代

めておくのは、かえって病気等に対する抵抗力を弱める結果につながり、犬にとって決して望ましいことではありません。部屋に入れるといたずらをして置き物などを壊すから、といって短いクサリで繋いでいる人がいますが、これでは本末転倒、むしろ虐待的行為といえるでしょう。

夏は涼しい日陰、冬は柔らかい毛布を敷いた暖かいハウスを用意してやれば、犬は機嫌良く戸外での生活を楽しんでいます。スキンシップが必要であれば、人間が外に出て犬と遊んでやればよいのです。



山、また夏の暑い日中に車で外出するとき、犬も一緒に連れていく人もいますが、暑さに弱い犬にとっては迷惑なことで、特に同行させる必要がないときは、家でお留守番をさせておく方がよいでしょう。

ペットロス

愛犬の死に直面することは誰にとっても非常につらく悲しいもので、ショックも大きいと思います。「こんな悲しい想いをするのはもういや、ペットは二度と飼わない」とか、「ペットは好きだし飼いたいけど、死ぬといやだから飼わない」という話をよく耳にします。しかし、われわれアニマルレスキューに携わっている者にとって、その気持ちは痛い程わかりますが、少なからず残念に思うことがあります。アークには前の飼い主に見放された多くの犬や猫が、やさしい飼い主と暖かい家庭に巡り会えることを夢見ながら暮らしています。ペットを亡くした人にアークの子をもらって下さい、とお願いしても上記の様な理由で断られるケースもあるのです。亡くなったペットが忘れられないという心情は察して余りありますが、その悲しみを乗り越え一匹でも新しい生命を救ってやってほしい・・・アークの動物達を見ているとそんな想いにかれます。亡くなったペットは自分の心の中で永遠に大切に飼ってやり、恵まれなかった別のペッ

トに幸せを与え、また自分も明るさを取り戻す。この方が亡くなったペットの供養にもなるのではないかと思います。・・・また「自分の可愛がっているペットが死ぬのは見たくないから、私はペットより先に死にたい」という人もいます。自分の死後、責任を持って飼ってくれる信頼できる人がいる場合はよいのですが、もしそうでない場合、そのペットはどうなるのでしょうか。飼い主が亡くなった後、その家族がまるで不要品のようにそのペットをアークに連れてくるケースが少なくありません。「亡くなった方の形見だと思って飼ってやって戴けませんか」といっても聞き入れず、やむなく引き取ることがありますが、そうでない場合そのペットは不幸のどん底に突き落とされることにもなりかねません。可愛がってくれた飼い主との別れは、ペットにとっても非常にショックです。その上ゴミのように捨てられれば、これ以上悲惨なことはありません。死は何人にも避けられないことです。ペットを葬るのは悲しいことですが、出来る限り飼い主が長生きしてペットの最後をみとってやってほしいものです。信頼する人の腕の中で死を迎えることが、ペットにとって幸せなのではないでしょうか。

以上、長期間に渡って種々な観点から「真の動物愛護とは」について考えて来ましたが、要は動物の立場で物考えることが大切なのではないかと思えます。人権、ならぬ「動物権」を充分に尊重した上で、動物は動物として扱ってやるべきではないでしょうか。イヌやネコは生物分類学の上から、生態もヒトとは異なります。犬には犬の生き方、猫には猫の生き方がある筈です。飼い主の独りよがりな愛情を動物に押し付けることは、ただの自己満足、人間のエゴイズムに過ぎないでしょう。「犬は犬らしく、猫は猫らしく」を考慮に入れた上で、生物の長たる人間としての愛情を精一杯注いでやるのが真の動物愛護ではないかと思えます。まだまだ言いたいことは沢山ありますが、今回を持ってこの項は終了と致します。長い間御購読いただきまして、誠に有難うございました。